

第 16 回国際日本学コンソーシアム「世界と日本：融合する文化」  
日本文化部会 2021 年 11 月 6 日

## 幕末の箱館における商品流通 - 欠乏品交易の貨銭代品払下げを中心に -

お茶の水女子大学 院生 原 基香

本報告では幕末の箱館で行われた欠乏品交易を取り上げる。

箱館は安政元（1854）年の日米和親条約で初めて開港した港で、その後の安政 5（1858）年の日米修好通商条約で長崎・横浜と一緒にいち早く貿易を開始した港である。また、開港以前から蝦夷地産物の流通における要港として発展してきた港町でもある。

欠乏品交易とは、薪水食料などの船内欠乏品を外国船に供給し、外国船から対価を受け取る取引のことを指し、和親条約で開港してから通商条約によって貿易が始まるまでの期間に見られる特徴的な交易である。外国船から受け取る対価は金銭・銀銭が中心であったが、船内に金銀銭が不足する場合は商品（貨銭代品）で支払う場合もあり、正式な貿易開始前にも下田・箱館で外国船から商品が流入していた。本報告では、貨銭代品、つまり欠乏品の対価として外国船から受け取った商品の払い下げについて紹介し、幕末の箱館港の一面を明らかにする。

まず、「第 2 章：幕末の箱館港と欠乏品交易」では開港後の箱館へ入港した外国船について、入港回数や国・船種、欠乏品の要求・取引状況について、表から明らかにする。また、入港・上陸した外国人へ対応した施設についても、それぞれの位置関係や役割を説明する。

次に、「第 3 章：箱館港における欠乏品交易の仕法」では、箱館の欠乏品交易の仕法について安政 2 年に箱館奉行が老中へ上申している史料に基づいて、欠乏品交易におけるモノとお金の流れについて見ていく。

最後に、「第 4 章：安政 6（1859）年薬種類の払い下げ一件」で、安政 6 年 2 月にアメリカ商船から受け取った大黄などの薬種の払い下げの事例を紹介し、欠乏品交易の貨銭代品の払い下げにおける実態に迫っていく。